

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 山下優介

弥生時代から古墳時代への移行期は、日本列島の国家形成期であり、歴史学・考古学の研究にとってきわめて重要な時期である。この問題への考古学の取り組み方法はいくつもあるが、土器の研究が重要な位置を占める。土器の編年をおこない時間軸を確立したうえで、地域色を明らかにし地域間の交流の状況をさぐることは、ヤマト地域を中心に形成される初期国家が地域へと及ぼした影響とその相互関係を明らかにするうえで欠くことはできない。山下優介氏は、このような土器の研究の重要性に鑑みて、現在の滋賀県域を中心とする近江地域に焦点を当て、近江系土器の関東地方にまで及ぶ移動の分析からその背後にある人の動きがどのような様態を示しそれがどのような要因でなされたのか、深く掘りさげた。

王権を形成するヤマト地域に対して、濃尾地方もまた巨大な勢力を擁した地域として知られており、関東地方などへの影響力が強いことが指摘されていた。山下氏はその影響力の強さを認めつつも、近江地域もまた土器の移動や墳墓の形成にとって関東地方への影響が強いことを予察して分析に臨んだ。これまで十分に深めてこられなかった視点として、近江地域を研究した意義は深い。山下氏が分析の対象としたのは、1世紀以降の弥生時代後期前半から4世紀の古墳時代前期までである。まず、時間軸の設定として器台形土器の型式変化によってこの時期を9段階に細別した。他の器種との組み合わせを一括資料からとらえた編年は、暦年代とのすり合わせを含めておおむね妥当な結論を導いている。

そのうえで、弥生時代後期前半と後期後半における近江系土器の近江地域内の地域性や周辺地域における動態、さらに関東地方への土器の波及を分析した。分析に用いたのは近江地域に特有の、口縁部が特徴的な受口甕形土器であるが、後期前半に湖南地方で製作された受口甕形土器を中心として近江地域周辺へと土器が移動することを確認し、後期後半には在地生産へと切り替わっていくこと、そして古墳時代になると関東地方にまで広く分布するようになることを論じた。弥生時代後期前半と古墳時代初頭の土器の移動の背景として、甕形土器の特性や胎土分析なども踏まえて、集団での人の移動が活発化したことを前方後方墳に供献された手焙形土器の考察をまじえて推察している。古墳時代開始期の近江系集団の役割を見直すうえで、実証的な研究にもとづく成果といえよう。

日本列島の国家形成初期における東日本を考える際に濃尾地方ばかり注目されがちであったが、本論文は近江地域に焦点を当ててその動向を細かく追跡して歴史的な意義に考察を及ぼした点で意義がある。近江地域は弥生時代後期後半に巨大な銅鐸を製作した一大勢力圏であったが、銅鐸に関する考察は十分とは言えない。また、ヤマト地域との関係性もほとんど触れられることはなかった。このように、課題も多いが、本委員会は本論文が博士(文学)の学位を授けるのに十分な水準にあると判断した。